

地 理 歴 史

1 教科の目標及び科目編成

(1) 教科の目標

我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め、国際社会に主体的に生きる民主的、平和的な国家・社会の一員として必要な自覚と資質を養う。

(2) 科目編成

改 訂		現 行	
科 目 名	標準単位数	科 目 名	標準単位数
世 界 史 A	2	世 界 史 A	2
世 界 史 B	4	世 界 史 B	4
日 本 史 A	2	日 本 史 A	2
日 本 史 B	4	日 本 史 B	4
地 理 A	2	地 理 A	2
地 理 B	4	地 理 B	4

教科の目標、科目編成、標準単位数、必修科目は現行と同様である。

2 改訂の基本方針

教育課程審議会の「答申」においては、小・中・高等学校を通じての社会科・地理歴史科・公民科の改善の基本方針として、国際社会に主体的に生きる日本人として必要な自覚と資質を養うことを一層徹底し、児童生徒の発達段階を考慮して、小・中・高等学校の一貫性を図るとともに、主体的な学習を一層重視するよう促している。

この「答申」を受けて、次のような視点を重視して各科目の目標及び内容の改善が図られた。

- (1) 自らが国際社会の形成者であることを自覚し、意欲をもって国際社会に貢献できるようにするため、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質の育成を重視すること。
- (2) 知識・理解の学習に偏り知識の詰め込みになりがちな学習を改め、学び方を学ぶ学習や課題解決的な学習を一層充実して問題解決的な能力の育成を重視すること。

3 改訂の内容

〈世界史A〉

(1) 目 標

近現代史を中心とする世界の歴史を、我が国の歴史と関連付けながら理解させ、人類の課題を多角的に考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う。

日本人にとっての世界史という観点から「我が国の歴史と関連付けながら理解させ」という文言が新たに挿入された。また、現代の諸課題に対する追究を一層重視するという立場から「人類の課題を多角的に考察させる」ことが明記された。なお「世界史A」、「世界史B」ともに現行の「国際社会に生きる日本人」の部分に「主体的に」という文言が挿入され、教科の目標との整合性が図られた。

(2) 内容の構成

ア 前近代史は諸地域世界の構造の把握という観点から精選され、一つの大項目にまとめられた。また近現代史も、16世紀から19世紀までの世界の歴史を「一体化する世界」に重点化して一つの大項目にまとめられた。

イ 日本を含む東アジア世界や東アジア海域の交流圏など、各時代の世界の中に日本が明確に位置付けられた。また、風土・民族・生活の重視、都市や港のネットワークへの着目、地域紛争や環境問題の考察など、地理的条件に留意した内容の構成になった。

ウ 主題学習が「(3)現代の世界と日本」に明確に位置付けられた。

(3) 内容の取扱い

ア 前近代史においては個々の地域を通史的に扱うことのないようにするとともに、東アジア世界の取扱いにおいては日本を明確に位置付けることとされた。

イ 主題学習については、例示された現代の世界の課題などを参考に適切な主題を設定し、生徒の主体的な追究を通して認識を深めるようにすることとされた。

〈世界史B〉

(1) 目 標

世界の歴史の大きな枠組みと流れを、我が国の歴史と関連付けながら理解させ、文化の多様性と現代世界の特徴を広い視野から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う。

現代世界の特徴と文化の多様性を広い視野から考察することによって歴史的思考力を培うことを一層重視した文言に改訂された。また、「我が国の歴史」との関連や「主体的に」の文言については、「世界史A」と同様である。

(2) 内容の構成

ア 歴史への関心や学習意欲を高めることをねらいとして、主題学習の「(1)世界史への扉」が新設された。また、「(5)地球世界の形成」においても主題学習が設定され、世界史学習の「導入」と「まとめ」でそれぞれ主題学習を行うなど、主体的な学習や歴

史的思考力の育成等が一層重視された構成になった。

イ 内容の(2)以降は、世界史の流れをより動的に把握し、同時代の世界の全体像をよりとらえやすくするため、現行の文化圏別の通史的構成を改めて、地域世界別の同時代史的構成が採用された。

(3) 内容の取扱い

ア 内容の全体にわたる配慮事項として、文化・文明などの概念、年代の表し方、時代や地域の区分などを把握させることが新たに付加された。

イ 「(1)世界史への扉」は、世界史学習の導入として三つの項目の中から適宜項目を選択し、二つ程度の主題を設定して追究させるものである。また、「(5)地球世界の形成」における主題学習は、「世界史A」と同様に、例示された課題などを参考に適切な主題を設定し、現代の諸課題を主体的に追究させようとするものである。

ウ 我が国の歴史との関連や地理的条件への留意については「世界史A」と同様である。

〈日本史A〉

(1) 目標

近現代史を中心とする我が国の歴史の展開を、世界史的視野に立ち我が国を取り巻く国際環境などと関連付けて考察させることによって、歴史的思考力を培い、国民としての自覚と国際社会に主体的に生きる日本人としての資質を養う。

近現代史を一層重視する観点から、現行の「近代社会の成立と発展の過程」が「近現代史を中心とする我が国の歴史の展開」という文言に改められた。また、現行の「国際社会に生きる日本人」の部分に「主体的に」という文言が挿入され、教科の目標との整合性が図られた。

(2) 内容の構成

ア 「(1)歴史と生活」が新たに設けられ、身近な題材に主題を求めて追究し、学び方や調べ方を身に付けさせる学習を充実させることとされた。

イ 内容の一層の重点化を図るとともに、近現代中心という科目の性格をさらに明確化し、現行の「(1)古代及び中世の日本とアジア」「(2)幕藩体制の形成と推移」を削除し、近代への橋渡しの性格をもつ「(2)近代日本の形成と19世紀の世界」から通史がはじめられている。

ウ 現行の「(5)現代の世界と日本」では、サンフランシスコ平和条約で時代を区切っているが、今次改訂では大項目を「(4)第二次世界大戦後の日本と世界」に改め、中項目アで第二次世界大戦後の政治の推移などを学習した後、中項目イで、アと同時代の生活意識や価値観の変化に着目して、日本経済の発展や国民生活の向上を考察させることとされた。

(3) 内容の取扱い

ア 新たに設けられた大項目の「(1)歴史と生活」については、五つの項目から二つ又は三つを選択して、作業的、体験的な学習を重視して実施することとされた。また、選択した項目の一つは、科目の導入として実施し、それ以外の選択した項目は、大項目

(2)以下の学習と関連させて指導計画を工夫することとされた。

イ 近現代史の指導においては、「多面的・多角的に考察し公正に判断する能力を育成する」ことが新たに付加された。

〈日本史B〉

(1) 目標

我が国の歴史の展開を、世界史的視野に立って総合的に考察させ、我が国の文化と伝統の特色についての認識を深めさせることによって、歴史的思考力を培い、国民としての自覚と国際社会に主体的に生きる日本人としての資質を養う。

基本的には現行の「日本史B」の目標を受け継いでいるが、今回特に現行の「総合的に理解させ」を、調べ考えることを一層重視する意味から「総合的に考察させ」とされた。また、「日本史A」と同様「主体的に」という文言が挿入された。

(2) 内容の構成

ア 調べ考える学習を重視する観点から、「(1)歴史の考察」が新たに設けられ、歴史への関心を高め、歴史の学び方や歴史的思考力を身に付けさせることができるよう工夫されている。現行の大項目の「(8)地域社会の歴史と文化」は学習方法の類似性が考慮され、大項目(1)のウとしてまとめられた。

イ 世界史的視野に立って考察させるため、「(3)中世の社会・文化と東アジア」や「(6)両世界大戦期の日本と世界」など、東アジアとのかかわりや世界の中の日本という観点が分かるような大項目の表題の示し方となっている。

ウ 現行の大項目(1)と(2)を合わせて「(2)原始・古代の社会・文化と東アジア」とするなど項目数を削減して、できるだけ内容の重点化を図り、時代を大きくとらえることができるよう配慮されている。

(3) 内容の取扱い

ア 内容の(1)のアについては、作業的、体験的な学習を重視することとし、「(ア)資料をよむ」については科目の導入として実施することとされた。

イ 内容の(1)のイは、歴史的思考力を深めさせるため、(ア)から(オ)までの中から生徒の実態等に応じて二つ程度を選択し、時代を区切らない主題を設定して適切な時期に実施するとされた。

〈地理A〉

(1) 目標

現代世界の地理的な諸課題を地域性を踏まえて考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う。

「地域性を踏まえて考察」することにより、「地理的な見方や考え方を培う」とし、課題の追究や調査などの学習の過程を一層重視した改善となっている。また、「地理A」、

「地理B」とともに現行の「国際社会に生きる日本人」の部分に「主体的に」という文言が挿入され、教科の目標との整合性が図られた。

(2) 内容の構成

ア 現代世界の諸課題の地理的考察に重点を置いた構成とされた。

イ 大項目(1)において、作業的、体験的な学習を通して地理的技能を身に付けさせることにより、学び方を学ぶ学習を一層充実させるような構成になった。

ウ 大項目(2)において、国際化の進展により重要な課題となっている異文化理解と、地域を超えて人類が協力して取り組むことが求められている地球的課題について、主題学習的に取り扱うよう項目構成が工夫された。

(3) 内容の取扱い

ア 「二つ又は三つ」の国や事項を選んで扱う項目内選択については現行と同様である。

イ 大項目(1)のウ及びエ、大項目(2)のアの(イ)及びイの(イ)における取扱いのように、複数の中項目ないし小項目から決められた数の項目を選んで扱う項目間選択が新たに取り入れられた。これは、学習内容の重点化を図るとともに、選んだ項目の学習に十分な時間数を配当して、学び方を学ぶ学習を効果的に実施するために、科目内選択が一層拡充されたものである。

〈地理B〉

(1) 目 標

現代世界の地理的事象を系統地理的、地誌的に考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う。

「系統地理的、地誌的に考察」することを明記し、それぞれの側面から考察することのよさを生かした学習が一層重視されている。また、「地理的な見方や考え方を培」うことや、「主体的に」の文言については、「地理A」と同様である。

(2) 内容の構成

ア 系統地理と地誌を両輪として体系立て、現代世界の地理的認識を目指すことに重点を置いて、内容の再構成が図られた。

イ 大項目(1)においては系統地理的に、大項目(2)においては地誌的に考察することにより、追究的な学習ができるような構成とされた。

ウ 大項目(3)において、地理的に考察することが効果的な地球的課題に重点を置いて、現代世界の諸課題を主題学習的に取り扱うよう項目構成が工夫された。

(3) 内容の取扱い

ア 「二つ又は三つ」の国や事項を選んで扱う項目内選択については現行と同様である。

イ 大項目(3)のアからエ及びオからクにおける取扱いのように、複数の中項目から決められた数の項目を選んで扱う項目間選択が、「地理A」と同様に新たに取り入れられた。

4 質疑応答

問1 「世界史B」における「(1)世界史への扉」のねらいや取扱いはどのようなものか。

この大項目は世界史学習の導入として、通史的な世界史ではなく、身近なものや日常生活の中から世界史を考えさせ、歴史に対する関心や世界史学習への意欲を高めようとするねらいで新たに設けられた。

実際の指導に当たっては、この「ねらい」を十分踏まえて適切な主題を設定し、抽象的で高度な指導にならないような配慮を行うことが大切である。また、生徒の学習意欲を高め、理解を深めるためには、他教科・科目の担当教員との連携も効果的である。

取扱いは「ア 世界史における時間と空間」、「イ 日常生活に見る世界史」、「ウ 世界史と日本史とのつながり」の三項目の中から適宜項目を選択し、二つ程度の主題を設定して追究させる学習を行うこととされている。

問2 「日本史B」における「(1)歴史の考察」のねらいや取扱いはどのようなものか。

この大項目は3つの中項目からなり、知識の教え込みになりがちな学習を改め、生徒の主体的な学習を重視する観点から新たに設けられた。特に「ア 歴史と資料」は何をとり上げ、どう指導するか工夫が求められる。「ア資料をよむ」は、「資料に基づいて歴史が叙述されていることを理解させ」、歴史の学習への導入として興味・関心を高めることとしている。「イ資料にふれる」は「博物館などの施設や地域の文化遺産について関心を高め、文化財保護の重要性について理解させる」内容となっており、適切な時期に実施することとなっている。ともに作業的、体験的な学習により、歴史を考察する基本的な態度や方法を育てるものである。また、中項目の「イ 歴史の追究」は、生徒の歴史的思考力を深めさせるため、五つから二つ程度を選択し、主題を設定して追究させる学習である。主題設定の観点として示されている事項に配慮し、単なる部門史とならないよう主題の設定や指導計画への位置付けを十分検討して取り組むことが大切である。

問3 「地理A」、「地理B」における学び方を学ぶ学習とは、どのようなことか。

「地理A」、「地理B」における学び方を学ぶ学習とは、作業的、体験的な学習を通して、地理的な見方や考え方や地理的技能を身に付けさせることである。

地理は現代に視点を置いて諸地域の特色をとらえる学習を展開しているが、社会や地域の変化が激しさを増している現代においては、ある時点の地域性を知識化して覚えても、すぐに役立たなくなることが多い。刻々と地域性が変化する時代においては、事実認識の結果を覚える学習ではなく、事実認識の方法を学んで、変化する地域の様子に関心を持ち続け、その時々地域性をとらえることができるようにすることが大切である。